

各関係機関の長
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター所長

平成 1 7 年度病害虫発生予報第 1 0 号について

平成 1 7 年度病害虫発生予報第 1 0 号を発表したので送付します。

平成 1 7 年度病害虫発生予報第 1 0 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

発生予報の概要

作物名	病害虫名	発生量の 平年比	記載ページ
施設果菜類	病害一般	-	2
	コナジラミ類	並	2
冬春キュウリ	べと病	並	3
	うどんこ病	やや多	3
	灰色かび病	並	3
	褐斑病	やや少	3
	ミナミキイロアザミウマ	やや少	3
冬春ピーマン	斑点病	並	4
	うどんこ病	やや多	4
	灰色かび病	やや多	4
	ミナミキイロアザミウマ	やや多	4
	ヒラズハナアザミウマ	やや少	4
	黒枯病（仮称）	前年より少ない	4
冬春トマト	葉かび病	やや多	5
	灰色かび病	やや多	5
	トマト黄化葉巻病（TYLCV）		5
冬春イチゴ	うどんこ病	やや多	5
	アブラムシ類	多	5
	ハダニ類	多	6

病害虫発生予察注意報第 1 2 号（H18.1.25発表参照）

作物の生育状況（1月中旬）

冬春キュウリの促成栽培、冬春ピーマン、冬春トマト、冬春イチゴは収穫期で、冬春キュウリの半促成栽培は定植直後であった。

2月の気象予報

平年と同様に晴れの日が多く、気温、降水量、日照時間とも平年並と予想されています。

（1か月予報 鹿児島地方気象台 1月20日発表）

発生予報の根拠および防除対策

施設果菜類

1 病害一般

厳冬期を迎え、施設内の温湿度管理が重要な時期になっている。昨今、重油価格の高騰で、夜温を低めに管理したり、暖房効率を確保するためにハウスサイドや内ホ口を多重被覆するなど様々な対策が取り組まれているが、反面では施設内が多湿になりやすいため、病害の発生が助長される傾向がある。

施設内環境・作物の樹勢等に十分留意し、病害を発見したら早期に防除することが必要である。

キュウリ：灰色かび病、べと病、菌核病、斑点細菌病など

トマト：灰色かび病、疫病、菌核病、葉かび病など

ピーマン：灰色かび病、菌核病、斑点病、黒枯病（仮称）など

1月中旬巡回調査における灰色かび病の発生は、冬春キュウリ、冬春トマト及び冬春ピーマンで平年並～やや多となっており十分注意する。

2 コナジラミ類（シルバーリーフコナジラミ、タバココナジラミ、バイオタイプQ）（並）

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬巡回調査では、冬春キュウリでの発生面積率29.5（平年18.3％）は平年並で、百葉当たり虫数6.6頭（平年15.2頭）は過去10か年で2番目に多い発生である。
- 2) 冬春トマトでの発生面積率15.4％（平年21.4％）、百葉当たり虫数0.2頭（平年1.7頭）は平年並である。
- 3) 冬春ピーマンでの発生面積率7.7％（前年20.0％、前々年0.0％）、百葉当たり虫数0.2頭（前年2.7頭、前々年0.0頭）で、いずれも前年より少ない。

[防除上の注意]

- 1) 施設栽培では防虫ネットを必ず設置するとともに、光反射マルチや近紫外線カットフィルム、黄色粘着板等の物理的防除手段を利用する。
- 2) シルバーリーフコナジラミとタバココナジラミ バイオタイプQの形態上の差異は成虫、幼虫ともに確認されておらず、両種の肉眼での区別は困難である。
- 3) タバココナジラミ バイオタイプQに効果のある殺虫剤が少ないことから、薬剤散布後は防除効果に注意を払い、必要に応じて適宜追加防除を行う。
- 4) 有効な薬剤に対する抵抗性の発達を回避する観点からも同一薬剤の連用は極力行わず、より一層ローテーション散布を心がける。また、抵抗性発達の可能性が低いポタニガード乳剤等の微生物農薬や粘着くん液剤等のコナジラミを物理的に窒息死させる薬剤を防除体系に組み込む。

冬春キュウリ

1. ベと病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 促成キュウリにおける1月中旬の発生面積率76.4% (平年71.4%)、発病葉率15.5% (平年18.2%) はいずれも平年並である。
- 2) 向こう1か月の気象は平年と同様に晴れの日が多く、気温・降水量は平年並と予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすく、発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、予防散布に重点をおき発生が見られたら初期防除を徹底する。
- 2) 肥料切れや草勢の衰えは発生を助長するので、肥料切れしないように肥培管理に注意する。

2. うどんこ病 (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 促成キュウリにおける1月中旬の発生面積率58.8% (平年40.8%) は平年よりやや多、発病葉率3.5% (平年4.6%) は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので発病を確認したら早めに防除する。
- 2) 耐性菌を生じやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。
- 3) 乾燥時に発生が多くなるので、ほ場が過乾燥にならないように管理に注意する。

3. 灰色かび病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 促成キュウリにおける1月中旬の発生面積率17.6 (平年17.5%) 発病果率0.4% (平年0.9%) は平年並であるが、過去5年間では最も多い発生となっている。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすいので、日中の換気、夜間の加温等で湿度低下をはかり、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等、結露防止に努める。
- 2) 花卉等の発病に注意し、初期防除を徹底する。なお、薬剤耐性菌が出現しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

4. 褐斑病 (やや少)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率11.8% (平年33.5%)、発病葉率1.3% (平年4.3%) はいずれも平年よりやや少である。
- 2) 向こう1か月の気象は平年と同様に晴れの日が多く、気温・降水量は平年並と予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、初期防除を徹底する。
- 2) 窒素肥料の多用は発病を助長し、過繁茂になって通風を妨げるので適正な肥培管理に努める。
- 3) 下葉の発病葉はほ場外に持ち出し処分する。

5. ミナミキイロアザミウマ (やや少)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の巡回調査では、17ほ場中4ほ場で発生が確認されたが、いずれも葉当たり0.5頭以下の微発生であった。

[防除上の注意]

- 1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度の内に防除する。

冬春ピーマン

1. 斑点病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率7.7%(平年 33.5%)は平年よりやや少、発病葉率0.6%(平年 2.8%)は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) ハウス内が高湿多湿にならないように、換気と水管理に注意する。また、整枝を行って茎葉が過繁茂にならないようにする。
- 2) 病原菌が植物体に侵入した後の防除効果は低いので、予防散布を行う。

2. うどんこ病 (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率53.9%(平年 48.4%)は平年並、発病葉率8.9%(平年 4.1%)は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- 1) 乾燥した条件で発生しやすいので、乾燥させすぎないようにする。
- 2) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので発病を確認したら早めに防除する。

3. 灰色かび病 (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率7.7%(平年 0.9%)、発病果率0.1%(平年 0.0%)は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすいので、日中の換気、夜間の加温等で湿度低下をはかり、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等、結露防止に努める。
- 2) 花弁等の発病に注意し、初期防除を徹底する。なお、薬剤耐性菌が出現しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

4. ミナミキイロアザミウマ (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率61.5%(平年 29.7%)は平年よりやや多、10花当り寄生虫数1.2頭(平年 1.0頭)は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 10花当り寄生虫数が1頭から被害果が出始める。また発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度の内に防除を徹底する。

5. ヒラズハナアザミウマ (やや少)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率7.7%(平年 28.0%)、10花当り寄生虫数0.2頭(平年 5.2頭)はいずれも平年よりやや少である。

[防除上の注意]

- 1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度の内に防除を徹底する。

6. 黒枯病(仮称) (前年より少ない)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の巡回調査では発生未確認(前年 30.0%)である。

[防除上の注意]

- 1) ほ場内が多湿条件にならないよう、排水を良好にするとともにマルチなどを行う
- 2) 被害茎葉、果実は伝染源となるのでほ場外に持ち出し、適切に処理する。

冬春トマト

1. 葉かび病 (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率30.8%(平成4.0%)は平成より多、発病葉率2.2%(平成0.5%)は平成よりやや多である。
- 2) 向こう1か月の気象は平成と同様に晴れの日が多く、気温・降水量は平成並と予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
- 2) 発病初期の防除を徹底する。

2. 灰色かび病 (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 冬春トマトでの発生面積率10.0%(平成3.0%)、発病葉率0.1%(平成0.0%)は平成よりやや多である。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすいので、日中の換気、夜間の加温等で湿度低下をはかり、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等、結露防止に努める。
- 2) 花卉等の発病に注意し、初期防除を徹底する。なお、薬剤耐性菌が出現しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

3. トマト黄化葉巻病 (TYLCV)

[防除上の注意]

- 1) 黄色粘着トラップ等を設置し、コナジラミ類(媒介虫)の早期発見に努めるとともに、栽培期間中を通して防除を徹底し、本虫の密度を抑制する。
- 2) 施設内外の雑草はコナジラミ類の寄主となるので除草を徹底する。また、施設内では栽培目的以外の不要な作物や観葉植物等は栽培しない。
- 3) 発病株は伝染源になるので、根ごと抜き取り、土中に埋めるかビニル袋に入れて枯れるまで密閉する。ウイルスは植物全体に存在しているので発病部位を除去しても伝染源になるため、必ず株全体を除去する。

冬春イチゴ

平成17年度病害虫発生予察注意報第12号(H18.1.25発表)参照のこと

1. うどんこ病 (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率41.7%(平成28.5%)、発病葉率4.5%(平成2.0%)はいずれも平成よりやや多である。

[防除上の注意]

- 1) 葉裏に発生しやすいので早期発見に努め、初期防除を徹底する。
- 2) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発病初期の防除を徹底する。
- 3) 発病果など被害部は伝染源になるので早めに取り除きほ場内に放置しない。

2. アブラムシ類 (多)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率41.7%(平成14.4%)、寄生株率7.8%(平成1.8%)はいずれも平成より多である。

[防除上の注意]

- 1) 多発すると新葉の展開が不十分になって奇形葉となったり、スス病を併発して、樹勢や果実品質を著しく損ねるので注意が必要である。
- 2) この時期の防除はミツバチへの影響が懸念されるので、十分に留意する。

3. ハダニ類 (多)

[予報の根拠]

- 1) 1月中旬の発生面積率 41.7% (平年 42.8%) は平年並、寄生株率 16.7% (平年 8.1%) はいずれも平年より多である。

[防除上の注意]

- 1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度時から防除を徹底する。
- 2) 株整理後の葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。
- 3) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。

日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>

農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>

農薬検査所ホームページ <http://www.acis.go.jp/>

- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。特に水質汚濁性農薬ベンゾエピン剤 (商品名、マリックス乳剤、粒剤等) は使用しないこと。

3 発生量 (程度) の区分

多	い	(高	い)	やや多いの外側 10% の度数の入る幅
やや多	い	(やや高	い)	平年並の外側 20% の度数の入る幅
平年並				平年値を中心として 40% の度数の入る幅
やや少	ない	(やや低	い)	平年並の外側 20% の度数の入る幅
少	ない	(低	い)	やや少ないの外側 10% の度数の入る幅 (平年値は過去 10 年間の平均)

4 予察情報の種類

病害虫防除・肥料検査センターから発表する情報は次の 5 つです。

- 1) 予報・・・向こう 1 か月の発生状況を予測し、毎月 25 日前後に発表する。
- 2) 注意報・・・主要な病害虫の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
- 3) 警報・・・主要な病害虫の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
- 4) 特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病害虫がある時や、病害虫の発生様相が特異な時に発表する。
- 5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病害虫の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

お知らせ (<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>)

病害虫防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。予察情報の根拠となる地域別調査データ、防除対策等を掲載しています。ぜひご利用ください。

【 文書取扱 】

病害虫防除・肥料検査センター 櫛間

TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-7499

E-mail: byogaichu-hiryo

@pref.miyazaki.lg.jp